

## 神明造社殿をめぐる伊勢神宮と在地の相克に関する研究

A Study on the Conflict between Ise Jingu Shrine and Locality around Shinmei-zukuri Building.

九州大学大学院芸術工学研究院 准教授 加藤 悠希

### （研究計画ないし研究手法の概略）

本研究は、神社本殿の形式・造形の意味の解明を目的とする申請者の一連の研究のうち、江戸時代における神明造社殿の造営をめぐってみられた伊勢神宮と在地の神社の論理の相克を検討しようとするものである。神社を造営するにあたって伊勢神宮正殿を規範とする神明造という社殿形式を選択する場合、本家本元の伊勢神宮とどれほど似ているか、あるいは似ていないか、という指標が必然的にあらわれる。つくる側も当然そのことをわきまえて、伊勢神宮の社殿形式に関する情報を持ったうえで、どれほど似せるか、あるいは似せないか、という計算をすることになる。大西源一『大神宮史要』によると、江戸時代にはしばしば伊勢神宮の祭神を勧請したとする在地の神社と伊勢神宮との間で相論があり、その相論のなかで社殿の形式について言及されるものもあった<sup>(1)</sup>。そこで、そのような社殿形式をめぐる相論を建築史の問題として考察し、両者の主張および建築の実態を比較・整理することで、江戸時代において神社本殿の形式や造形が決められる背景にどのような論理が存在したかを考察することを、本研究の課題とする。

本研究で特に焦点を当てるのは、文化12年（1815）に神宮を模した造制を停止させたとされる京都の日向社（現在の名称は日向大神宮）である。江戸時代に伊勢神宮を模して建てられた各地の神明造社殿の実態を理解するためには、一方の当事者である伊勢神宮側の資料を鵜呑みにするわけはいかず、在地神社側の資料や実際に建てられた社殿などもあわせて比較・検討する必要がある。そこで、京都市歴史資料館所蔵の日向大神宮文書と、神宮文庫所蔵の伊勢神宮関係の記録類とをあわせて読み解くことで、相論における両者の論理の比較・整理を試みることにした。

### （実験調査によって得られた新しい知見）

はじめに

本研究において焦点をあてた日向社は粟田口神明・夷谷神明などとも呼ばれ、室町時代に創建されたが、戦国期には衰退し、近世初頭に再興された。その後寛政期には社殿が荒廃したらしいが、その後境内が整備されたところで、文化12年の相論を迎えた<sup>(2)</sup>。以下、伊勢神宮と日向社の双方の資料を通して、その経緯と論理を略述する。

#### 1. 日向社と伊勢神宮の相論

文化12年6月に伊勢神宮側が把握した情報によると、日向社は境内の木札や幌・石灯笼などに「大神宮」「天照皇太神宮」「外宮」「内宮」さらには「五十鈴川」などと記載して、境内全体を伊勢神宮になぞらえようとしていた。また、社殿については「社之模様千木鱧

木を上、屋根萱葺等全両宮を摹し候様子ニ御座候」というものであった<sup>(3)</sup>。

そこで、伊勢神宮は京都にいる神宮祭主を通じて日向社に対する取締りを訴えた。日向社は神号の記載のあるものを取り除くなど一応の対応を示し、祭主家はそれをもって内々で解決することを望んだが、伊勢神宮側はより厳格な取締りを求め、京都町奉行所が日向社に問い合わせることとなった。その結果として、社殿に関して問題となった点については次のようなかたちで解決が図られた。

(1) 伊勢神宮側が抗議した千木・鯉木について、日向社は往古からあるので取除かない旨を回答した。さらに伊勢神宮側から千木の先端の切り方を外宮と内宮で区別する点が問題であることを指摘されると、先端の切り方を両社でそろえるという方針を示した(「両社屋根千木、伊勢両宮同様之千木形ニ無之様、両社共同様之伐形ニ可仕候」<sup>(4)</sup>)。

(2) 屋根が萱葺であると指摘された点については、往古より山中の笹・薄・麦藁等で葺いており萱葺ではないと日向社は回答し、今後修復する際も萱葺にはしないかと問われて、萱葺にしない旨を誓った。

訴3の結果としては伊勢神宮の言い分が認められたことになるが、その経緯からは、伊勢神宮側の積極的な取締りをもとめる意識が神宮祭主や幕府の所司代・京都町奉行所に共有されていたとは言い難いことが確認される。結局日向社は神明社として復活し、近世後期の造営とみられる神明造社殿が今に現存している。

## 2. 三井寺境内社への対応

日向社をめぐる相論と同時期に、大津の三井寺境内においても伊勢神宮を模した神明社が建てられていることが発覚した。建物の意匠に関しては、千木・鯉木・萱葺に加えて高欄があるという点も指摘された。この三井寺境内社については、いまだ社殿が造営中であることから完成前に非公式なルートで申し立てることになり、伊勢神宮側から祭主に対応を依頼した。この件については内々に解決されたのか、その後の経緯が確認できないが、神明勧請や社殿の模倣に対して取締りを訴えようとする伊勢神宮の姿勢は日向社に限られたものではなく、問題を把握したら訴え出るという体制になっていたことを確認することができる。

## 3. 社殿の模倣を巡る論理

相論のあった文化12年当時の日向社の社殿の姿が現在と同じであったかは改造等の履歴の確認ができていないため判断できないが、おおよそ神明造風の社殿が建てられていたことは間違いない。しかし、相論で問題となるのは千木・鯉木・萱葺屋根といった要素であり、相論において神明造という言葉は用いられない。また、独立棟持柱や、破風板と連続する千木、破風板に取り付く鞭掛などといったいわゆる神明造の特徴的要素についても、おそらく当時の社殿にもみられたであろうが、伊勢神宮側から模倣として指摘されることはない。すなわち、伊勢神宮が社殿について「全両宮を摹し候様子」とするポイントは、現在一般に理解される神明造の形式的特徴とはどうも食い違っている。

「〇〇造」という社殿形式の分類は、江戸時代において大工技術書等にみられ、神明造についても17世紀末から18世紀初頭の『建仁寺派花伝書』や『神道名目類聚抄』などに、おおよそ現在の神明造の理解に近いものが記載される<sup>(5)</sup>。ただし、ここでいう神明造はより

正確に言えば伊勢神宮の社殿形式そのものでなく、伊勢神宮の祭神を勧請する際に建てるべき簡略化された社殿形式であった。その区別が明瞭に示されるのが甲良宗賀による貞享元年（1684）の識語を有する『黒田宗信伝来文書』「上棟之巻」で、そこでは「伊勢神宮之事は延喜式にも有之、其外内外の儀式帳など云秘本などにもしるしこれあれとも、神宮の外他に用ゆへき事ならねは云へきにあらず、然とも勧請の神宮田舎にも有へきなれば、神明作りの事は兼而たしなむへきなり」と記される<sup>(6)</sup>。この時点で神明勧請の際に神明造の社殿を作るのが当然のことと考えられていたことが理解できよう。また、少し時代が下って、立石定準による『匠家必用記』（宝暦6年（1756）刊）下之巻では、「延喜式にのせたる由来久しき宮社ハ猶もつて神明造社造にして可也。然れとも伊勢及其外の名高き御社ハ故実を用て造られしことなれば、ことごとくその風に似するハ憚るべきこと也。只何となく質素清浄にしてかざりなく叮嚀に古代の風を考造るべし。」という<sup>(7)</sup>。神明造の社殿で祀る祭神の対象範囲は『黒田宗信伝来文書』と異なるが、ここでも神明造で建てることを推奨しつつ、伊勢神宮に過剰に似せることは憚るべきであるとの認識が示されるのである。

江戸時代において神明造についてそのような認識があることを念頭に置きつつ、日向社と伊勢神宮の相論を見直すならば、いわゆる神明造の形式で建てることは社会的に認められつつも、伊勢神宮に対して憚るべき一線というのが、伊勢神宮の訴えに指摘される千木・鯉木・萱葺などという要素であった、とすることで一応の整合的な解釈は成り立つ。ただし、そのような短絡的な仮説が成り立つかどうかは、他の事例を含めたさらなる検証が必要になることはいまでもない。いずれにしても近世における社殿形式の認識のされ方が、現在とは異なっていたことは十分に示されたところである。

おわりに

本研究課題では、本来は日向大神宮以外の事例についても調査・研究を進めるべく各地の神社や資料館の調査を計画していたが、新型コロナウイルス流行のために出張はほとんど断念せざるを得ず、文献の読解を中心とする作業へと方針の変更を余儀なくされた。結果として日向社に関しては上述したような知見が得られ、その成果を論文にまとめた（投稿済）。また、模倣あるいはそれに類する概念の基礎的な整理や、近世・近代における神明造社殿の事例収集等、本研究課題を今後深化・発展させていく上で不可欠な情報の蓄積も進められた。とくに先に触れた神明勧請と神明造の関係について、日向社の前身である粟田口神明社、あるいは寛政度に相論のあった尾張の岩倉神明社などについても、資料の収集・分析をすすめている。さらに事例を増やして検討を重ねていくことで、近世において神明造社殿をつくるのがどのような意味をもっていたのか、より確実な理解へと結び付けていきたい。

### （ 発 表 論 文 ）

加藤悠希「神明造の差異と反復」（『伝わるかたち/伝えるわざ—伝達と変容の日本建築』東北歴史博物館、2020年9月）54～57頁

加藤悠希「伊勢神宮の社殿・境内の模倣とその論理—文化十二年京都日向社一件を中心に」（投稿済、査読中）

## 注

---

- (1) 大西源一『大神宮史要』（平凡社、1960年）。
- (2) 近世の日向社に関する先行研究として、村上紀夫「一九世紀京都近郊の神社と神人一日向神明社にみる」（『近世京都寺社の文化史』法蔵館、二〇一九年）がある。
- (3) 『言彦卿日次』（神宮文庫所蔵）文化12年6月17日条掲載、祭主政所青木大隅・河井長門宛の口上書別紙写。
- (4) 日向大神宮文書131（京都市歴史資料館所蔵）。
- (5) 加藤悠希「神社本殿における形式の選択と模倣」（『建築におけるオリジナルの価値』日本建築学会、2020年）。
- (6) 坂本忠規・加藤悠希「『黒田宗信伝来文書』「上棟之巻」の翻刻と紹介」（『竹中大工道具館研究紀要』32号、2021年）。
- (7) 日本建築学会デジタルアーカイブスを参照。